

【平成24年度の研究の概要】

平成24年度 国立教育政策研究所教育課程研究センター
関係指定事業研究協議会
教育課程研究指定校事業・生活科(平成23・24年度)

生活科における 言語活動(表現活動)の 充実に関する研究

本校は、平成23・24年度文部科学省から「教育課程指定校事業(生活科)」の研究委託を受け2年間の研究を進めてきました。

「生活科における言語活動(表現活動)」の充実に関する研究を主題に、生活科・総合的な学習の時間で育てたい力に基づいた単元計画とマイカリキュラムを作成し、1年間を見通した子どもの育成に取り組んできました。

その研究の概要をご紹介します。

本校の概要

- ▶ 平成5年4月1日創立 13学級 児童数294人
- ▶ 和歌山市北東部 和泉山脈の南 標高45mの地
- ▶ 紀ノ川や千手川、山、田畑に囲まれ、自然環境に恵まれた校区



本校は、平成5年に開校。和歌山市の北東部に位置し、山や川、田畑に囲まれた自然豊かな環境の中にあります。

校区の様子



学校の北側にはハイキングコース、東側には少し上流に行くとホテルが飛び交う千手川があります。

また、学校から南側には、商店やスーパーなどが建ち並んでいます。生活科や総合的な学習の場として、積極的に繰り返し出かけ、学習する機会が多くもっています。

校内の様子



校内にはたくさんの生き物がいます。

ヤギ牧場には、2頭のトカラヤギが、また、玄關にはたくさんの水槽が並び、干手川に住む生き物や地域の池で捕れたザリガニなどがいます。

この他にも、多くの学級がザリガニやカメ、金魚、メダカなどの生き物を飼っています。

校内の環境



校内には、図書ホールをはじめ、各階段の踊り場には、図書コーナーを設け、子ども達が休憩時間に自由に読書ができる環境を整えています。2階、3階には様々な活動ができる小ホールもあります。

また、各教室には電子黒板が設置され、効果的なICTの教育活用についても研修し、日々実践しています。

本校の研究主題

子どもが自らの世界を拓く学習

～生活科・総合的な学習の時間における
言語活動(表現活動)の充実に関する研究～

- ▶ 生活科・総合的な学習の時間を研究の柱にすえ、授業実践を行う。(平成17年度～)
- ▶ 文部科学省 教育課程研究指定校事業
「総合的な学習の時間」(平成21・22年度)
「生活科」(平成23・24年度)
文部科学省教科調査官・田村 学先生にご指導を受け、授業実践に取り組む。

本校では、「子どもが自らの世界を拓く学習」を研究主題とし研究を進めてきました。

平成17年度から、生活科・総合的な学習の時間を研究の柱に据え、平成21年度からは、文部科学省 教科調査官 田村 学先生にご指導をいただき、単元づくりや子どもの見とりについて研修を深めてきました。

大切にしていること

- ▶子どもに根ざした単元づくり
- ▶マイカリキュラム
- ▶他教科等(特に国語科)との関連

子ども達は一人ひとり違った背景を持っていて、同じ物、同じ人と出会っても、その反応は様々です。

教師は、子ども一人ひとりにより適切で、有効な支援を行っていきたいと考えます。そのためには、子ども達一人ひとりを見つめ、「こんな子」と決めつけず、探り続けることが必要だと考えます。

そこで、本校では、子どもに根ざした単元づくりを心がけてきました。

学級の子どもの実態から、マイカリキュラムを作り、めざす子どもの姿をもち、日々実践に取り組んできました。

また、学年内で児童の実態を交流し、その学年としてつきたい力も常時話し合いながらカリキュラムを見直してきました。

さらに、今回の研究を進めるにあたっては、言語活動の充実のため、特に国語科と生活科との関連を図ることを意識して取り組んできました。

マイカリキュラムは、各担任が年度当初に計画を立て、一覧表にしたものです。

その際、各教科間、特に生活科と他教科等との関連を意識するため、内容の関連が考えられる部分を実線で、能力的な関連が考えられる部分を破線で結び、相互の学習の充実を図ってきました。

実線を引いた例として、「いきものだいすき～ザリガニとなかよくなろう～」で、ザリガニのお世話をして、愛着をもったり体のつくりについて知ったりします。そのザリガニを題材として、図工「いきものだいすき」で絵を描くことへ関連させたことがあげられます。

また、破線を引いた例として、国語「すきなもの、なかに」で学習した「好きなもの」と「その理由」を順序立てて2文で書ける力や、書いたものを出し合い感想を伝え合うことができる力を、「すごいきぞ！かぞくのおしごとちょうきたい」の中では

マイカリキュラム		生活科と他教科等との関連をつなぐ 実線・・・学習対象・事項、知識、技能 破線・・・資質、能力、態度、意欲		
	4月	5月	6月	
算数	かずとすうじ	なんばらふめ いづくいくつ	いろいなるなかに ふえたりへた たしざんけい	
国語	はるをたのしもう！ はるみつげ	なをたのしもう！ のりがつつみ みずあそび	すきなもの、なかに いぬやねのうた かたかなをみつげよう	こぼれあそび じがまのぼんし まのいりよろい むかしのなご いつぱい
生活	がっこうだすき！ がっこうたんけん	ザリガニとなかよくなろう！	いきぞ！かぞくのおしごとちょうきたい	あそびをたのしもう！ アサガオをしよう！あそびのおもち
図工	かたがたのいすき まっぺはって じぶんのかお おんがひんがえ	いきものだいすき たなばたかざり	いぬやねのうた かたかなをみつげよう	あそびをたのしもう！ アサガオをしよう！あそびのおもち

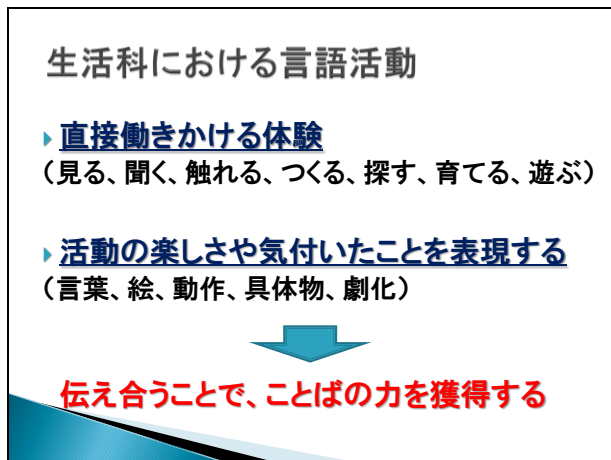
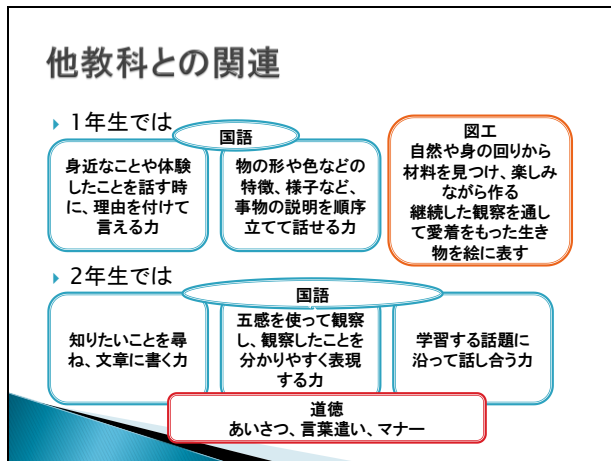
言語活動の充実のため、特に国語科で身に付けた能力との関連を重視

「自分の家族の自慢したいこと」と「その理由」を書き、伝え合う活動で活用することを意識して取り組みました。

言語活動の充実のため、今回は特に国語科で学習し身に付けた能力と生活科との関連を重視してきました。

例えば、1年生では、国語での能力を重視して取り組みました。また、図工との関連も意識して取り組んできました。

2年生でも国語での能力を重視して取り組み、それと合わせて、地域の方やお年寄りの方との交流するときのあいさつや言葉遣い、電車など公共物を利用する時のマナーなどを、道徳の題材などを関連付けて学習を進めていきました。



生活科における言語活動とは、例えば、見る、聞く、触れる、つくる、探す、育てる、遊ぶなど、直接働きかける体験を通し、活動の楽しさやそこで気付いたことを言葉、絵、動作、具体物、劇化などの方法によって表現する学習活動です。その表現方法は実に多様なものが考えられ、子どもの個性や願いを反映させることができます。

生活科での体験は、個別的なものですが、感じ取ったことを伝え合う中で、子ども達は様々なことばを獲得していきます。このことから体験を重視する生活科は、子どもの「ことばの力」をのばす絶好の教科だと考えられます。

従って、生活科では、児童が充実した活動や体験をするとともに、豊かな「ことばの力」を獲得できるような気付きが大切です。そこで、教師の手だてが必要になってきます。

本校では、生活科において、次の3点を大切に考えてきました。

本校で大切にしてきた教師の手だて

▶ 十分な体験活動の場を保障する

試行錯誤したりする時間と場所を保障する

▶ 振り返って表現させる場の設定

体験の後のかく活動、視点を持たせる声かけ

▶ 伝え合う場の工夫

様々な表現方法で、子どもの願いを確かめながら、表現させる

まず、一つ目は、『十分な体験活動の場を保障する』ことです。必要であれば、何度も繰り返し活動させる時間と場所を設定してきました。

二つ目は、『振り返って表現させる場の設定』です。

活動の後には、子ども達の気づきが深まるよう、視点を与えてかく活動をしてきました。かこうと思ってよく見聞きし、調査をすることで、無自覚なものが自覚化されます。

絵や文でかくことにより、子ども達は自分の気づきを整理したり、考えを残したりすることができます。

三つ目は、『伝え合う場の工夫』です。体験をすると、子ども達は様々なものを見つけてきます。子どもによって、「構え」が違うため、振り返りにはそれぞれの気づきが出てきます。それを、伝え合うことで気づきが意識化されたり深まったりします。一人ひとりの気づきを全員で共有することで、集団として高めあえると考えています。

朝の会は、子ども達が中心となる活動なので特に大切にし、どの学級でも子ども達同士で伝え合う時間と位置づけています。

1年生の6月の朝の会では、A君が「家の近くの川で、カメを見つけました。近くに卵もありました。」と話しました。あまり話が得意ではないA君ですが、家で絵を描いてきて友達に見せました。

A君の話に続いて、

「見つけた時、どんな気持ちでしたか。」、「カメは大きかったですか。」とおたずねが続きます。

朝の会の様子



朝の会の様子



すると、A君が、カメの絵と卵の絵の2枚を見せました。

出てきた卵の絵に触発されて、「卵は何個ありましたか。」とおたずねし、みんなで絵を見ながら数え始めました。

「僕は、カメを飼っています。でも卵は見たことがないです。」卵を見つけたA君はすごいな、という空気が広がり、自分も卵を見つけようという子もいました。

このお話がきっかけで、学級でカメを飼う活動にまでつながりました。

私たち大人は親切すぎて、ともすれば子ども達の伝え合う場を奪ってしまっていないでしょうか。自分の思いがうまく伝わらなかった体験があるからこそ「伝えたい」という気持ちが生まれてきます。少し不器用でも、時間がかかっても、子ども達が様々な話を自由に出せる場を大事にしています。

生活科の具体的な取り組みを紹介します。

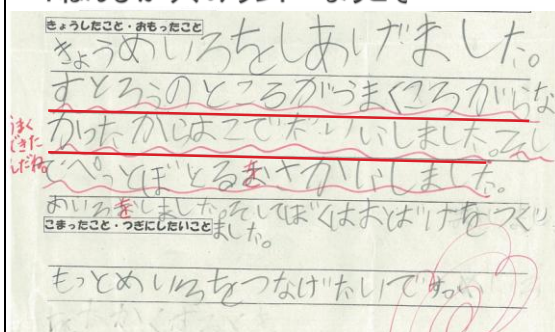
1年光組「みんなであそぼう！！」では、身近にある物で遊ぶ物を作ることを通して、遊び方を工夫したり、子ども同士が自然に話したり遊んだりできるのではないかと考えました。また、個人やグループで遊ぶ物作りに没頭し、自分の思いを表現したり、互いに自分の考えを出し合ったりして、協力して作業することができるのではないかと考え、取り組みました。

実践例1年 みんなであそぼう！！ 1ねんひかりぐみランドへようこそ

- ▶ 身の回りの物を使って、自分の考えた方法で遊ぶものを作ったり遊んだりできる
- ▶ 友達と協力して活動する中で、自分や友達のよさに気付く
- ▶ 子ども達の活動は日々変化。時には担任も活動と共にし、子ども達の思いを大切に



実践例1年 みんなであそぼう！！
1ねんひかりぐみランドへようこそ



B君は、日頃はとてもおとなしく、何事にも最後まで根気よくがんばる男の子です。お化け迷路チームのおたのしみコーナーで遊ぶものを作り始め、友達に「すごい物作っているね！」とほめてもらいました。それが自信につながり、休憩時間になると、生活科室に行って作業をするようになりました。

B君が作った作品に興味を示す子が多く、自然と友達が集まってきました。

この作品づくりでは、ストローの部分でなかなかうまくビー玉が転がらず、何度も試行錯誤して改良している様子が、読み取れます。

ストローから他の物に替えたり、段ボール紙を補助にしたりして、成功させ、もっと迷路をつなげたいと、次への意欲もつながった活動でありました。

実践例1年 みんなであそぼう！！
1ねんひかりぐみランドへようこそ

▶ 単元を通して

- 休憩時間も生活科室へ行き、物作りを楽しむ
- 生活科室からなかよしホールへ場所を移し、活動がよりダイナミックに
- 幼稚園児や他学年の児童を招待し、交流する機会を何度ももつ

十分な活動の時間や場所を提供することで、より
かかわり、思考錯誤し、遊ぶものや他者、自分への
気づきが深まった

単元を通して、ほとんどの児童が、休憩時間も活動の場である生活科室へ行き、物作りを楽しんでいましたが、場所をより広いなかよしホールに移したことで、活動がよりダイナミックになりました。

さらに、場所を移したことにより全校児童の注目的となり、例年の幼稚園児との交流だけでなく他学年の児童を招待するなどの交流する機会を何度ももつきっかけにもなりました。

十分な活動の時間や場所を提供することで、作業する仲間とよりかかわり、試行錯誤し、遊ぶ物や他者、自分への気づきが深まったと考えています。

実践例1年 いきものだいすき
～ザリガニとなかよくなるう～

- ▶ 生き物をかわいがり、愛着を持つ
- ▶ 飼育活動を通して友達とのかかわりを強くできる
- ▶ 体の特徴や不思議さ、動きの面白さに気付く



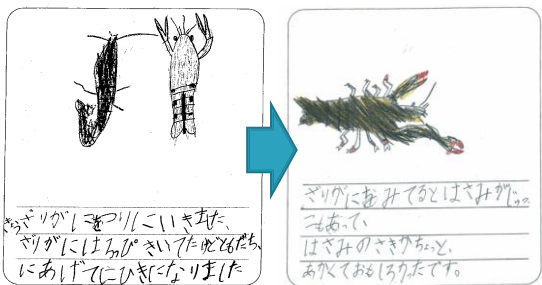
1年風組「いきものだいすき～ザリガニとなかよくなるう～」では、担任は生き物との触れ合いを通して、生き物をかわいがり愛着をもてる、また、友達と一緒に飼育することで、仲間とのかかわりを強くできると感じました。さらに、体の特徴や不思議さ、動きの面白さに気付き、表現する力もつけられるだろうと考えました。

そこで、担任が学習材として選んだのがザリガニでした。子ども達ができるだけ繰り返しかわりが持てるように、一人一匹ずつ飼うことにしました。

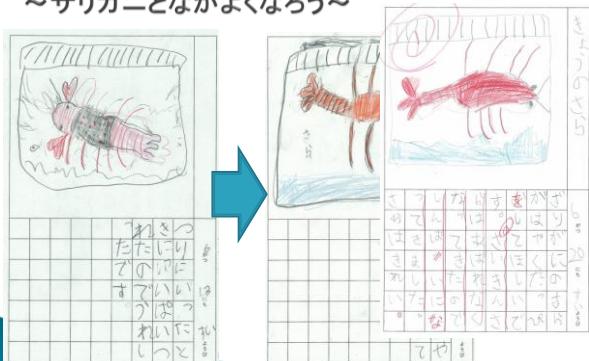
C君は、元気いっぱいの男の子です。ザリガニを飼い始めた時も興味津々でした。

これは、C君がかいたワークシートです。2枚を比べると、マイザリガニを飼い続けていっしょに遊んだりするうちに、足の数、体の色や形、ハサミの先端の色の違いなど、ザリガニに対する認識が深まり、科学的な見方ができるようになってきました。

実践例1年 いきものだいすき
～ザリガニとなかよくなるう～



実践例1年 いきものだいすき
～ザリガニとなかよくなるう～



Dさんは、絵や文章で表現するのが苦手な子でしたが、細かな所まで見ることを意識させると、目の付いている位置や、胴体の太さ、触角の長さにも注目するようになりました。そして、お友達のザリガニと比べることで、「私のも早く脱皮をしてほしいなあ。」と願いをもつようになりました。

思いを引き出すような言葉かけをすることで、情意的な気付きも大切にする支援を心がけています。

実践例1年 いきものだいすき
～ザリガニとなかよくなるう～

▶ 単元を通して

繰り返しかかわることで、対象との距離が縮まり、
様々な気付きが生まれる

↓
次の活動への動機づけになる

↓
さらに対象との距離が縮まる

↓
気付きの質が高まる

このように、毎日対象にかかわることで、ザリガニとの距離が縮まり、様々な気付きが生まれました。それが活動意欲を生み出して、もっとザリガニをかわいがり、さらに新たな気付きが生み出すことにつながりました。

また、前にかいたものと後にかいたものを示して、「前とここが変わってきたね、すごいね。」と、担任が伝えることで、自信をつけ、もっとしっかり見てみたい、もっとかわいがるとう飼育や観察を続けることができました。

実践例2年 ようこそ2年風組へ
～おじいちゃん・おばあちゃんといっしょに～

- ▶ おじいちゃん・おばあちゃんとかかわり合いながら、楽しく活動したり、よさに気付く
- ▶ 楽しかったことや気付いたことを表現できる
- ▶ 自分達で交流会を計画し、力を合わせて活動できる



「ようこそ2年風組へ」では、地域のお年寄りとの交流を通して、人と関わる楽しさやよさに気付き、自分もがんばりたいという思いを抱いたり、仲間と協力して交流会を計画したりすることを期待して取り組みました。また、お年寄りの方から教えてもらったことを言葉や文章などで表現し、広めたりできる力を育てたいと考えました。

実践例2年 ようこそ2年風組へ
～おじいちゃん・おばあちゃんといっしょに～

教えてもらう(活動)



教え合う(活動)



教える(活動)



楽しかったこと・
気付いたことを
書く、伝え合う

思ったこと・
気付いたことを
書く、伝え合う

交流会では、長寿会の方とペアになり、遊んだり一緒に料理をして食べたりしました。また、インタビューをしたりもしました。ペアになった方がとてもやさしく遊びを教えてくれたので、その優しさに気付き、自分もこんな人になりたいと作文に書いている子もいました。また、普段はおとなしいE君が、けん玉がとても上手な一面をみんなに褒められ、自分なりの活躍の場を見つけていました。

子ども達は、長寿会の方との交流を通して気付いたことを伝え合い、子ども達同士で教え合う活動をしました。

このように、活動を通して楽しかったことや気付いたことを表現し、次の活動へ生かし、ま

たその活動を通して気付いたことや認められたことをさらにその次の活動へとつなげていきました。

2年光組は「レッツゴー町たんけん」です。

町たんけんでは六十谷で生活している人々と出会い、自分から進んでかかわり、親しみや愛着をもたせるとともに、自分の喜びや発見したこと、ハテナを伝え合うことで、仲間と高め合える活動をしたと考えました。

「どうしてかな」「不思議だな」と課題をもたせる目を育てたいとも思っていたので、『ハテナ探し』を大事にしました。

1度目の町たんけんでは、様々なものに目がいくものの、緊張してお店の人に声もかけられない様子でした。

それぞれのめあてをもち、2度目のたんけんに行きました。この日は、畳屋さんに畳を作るところを見せてもらいました。見たことがない道具や機械を扱う職人さんに、「すごい」「カッコいい」という声が上がりました。自然とインタビューする子も増えました。

たんけん後の伝え合いでは、畳作りや、その時に使う長いものさしを関連付けたやりとりが続きました。「なぜ畳屋さんを始めたのか」「どうして上手に作れるようになったのか」など、たくさんのハテナが出てきたため、それらを解決するために、再度たんけんに行きました。

実践例2年 レッツゴー町たんけん ～六十谷の人に教えてもらおう～

- ▶ 人と出会い、親しみや愛着をもたせる
- ▶ 伝え合うことで仲間と高めあえる
- ▶ 課題をもたせる目を育てる



実践例2年 レッツゴー町たんけん ～六十谷の人に教えてもらおう～

- ▶ 2度目の町たんけん



実践例2年 レッツゴー町たんけん
～六十谷の人に教えてもらおう～

▶ 単元を通して

目に見えるものが、伝え合う活動を通して、
関連付けられた気付きになる



次の活動への動機づけになる



視点が広がった発見やハテナが生まれる

これを繰り返すことで、
目に見えないものにも気付いていく

この単元を通して、子ども達は、まずは、目に見えるものを発見し、仲間と自分の発見を伝え合う中で気付きが意識化され、それが次の活動への動機付けとなって、また活動をしました。すると、伝え合いで視点が広がっているため、新しい発見やハテナがあり、それを繰り返すことで、目に見えるものだけでなく、見えないものにも目が向き、人の努力や思いに気付いていきました。

研究成果と課題

- ▶ 生活科だけでなく、国語科等関連した教科の学習が充実
- ▶ 関連した両教科の内容を精選、時数短縮にもつながった
- ▶ 3つの手だてを大切にすることで、言語活動(表現活動)が充実し、子どもの様々な気付きや質の高まりに効果があった

以上、生活科の実践の一端を紹介しました。他の教科のどの項目が、生活科のどの単元とかがかわるか意識して取り組んだことで、生活科だけではなく、他の教科の指導も変わったように感じます。

単に教科書通りの内容を教えていたものが、生活科の内容を意識し、特に、国語科では、学習した能力を、生活科のこんな場面で活用できるのではないかを考え、より密な関連を図ることができました。

また、限られた時数の中で、両教科の内容を精選し、授業を進めていくことで、時数短縮にもつながったとも考えています。

そして、3つの手だてを大切に実践を行ってきたことで、子ども達の言語活動や表現活動が充実し、様々な気付きが生まれ、気付きの質の高まりに効果があったのではないかと考えています。

研究成果と課題

- ▶ 他教科等との関連をより意識した
単元構成
- ▶ 子どもの気づきのみとり
- ▶ 具体的な支援のあり方

反面、課題もあります。

「かく力」「伝え合う活動」を、さらに、充実するために、他教科との内容、能力の関連を、より、結びつけて、子ども達の力を育てていく必要があると考えています。

また、子ども達は、一つの活動や体験で様々な思考をして、多様な気づきをしていますが、それは内面的なものであるため、適切な見取りをするのが難しいということです。

そして、そのための児童への声かけ、発問、板書、掲示など、具体的な支援をどのようにするかは、まだまだ試行錯誤中です。

今後も子ども一人ひとりを見取ることを大切に、その子にとって価値のある支援ができるよう、研究を深めていきたいと考えています。